第一部【話題提供】　13：40～15：30

NPO法人グリーンテクノバンク水島理事から自己紹介と今回の震災への哀悼が示され、続いて本日の話題提供、総合討論の進行について説明がありました。

【コーディネーター：水島】 未曾有の災害に呆然とテレビを眺めていましたが、通信回線が遮断されたために被災されたみなさんがまったく情報を得られていない、本当に情報を必要とする方々に必要な情報が届いていないという実態をつくづく感じました。これからもいろいろなところでさまざまな出来事が起こると思いますが、そうしたときに情報が得られない実態を少なくしたい、また道内の農村・過疎地域にみられる情報格差を何とかしなければとの意識で研究会を企画させていただきました。本日は6人の方々に話題を提供していただき、それに基づいて、会場のみなさまからのご質問を含めて話題提供と総合討論の部を進行していきたいと思っています。みなさまからのご質問等、積極的なご発言を期待しています。

（つづいて天使大学看護栄養学部栄養学科、高野良子氏から話題提供の1番目として地域医療・福祉に関する研究事例の紹介がありました。）

話題１：「地域における医療・福祉の課題」（資料－３）

天使大学看護栄養学部栄養学科　高野　良子

【講師：高野】　私どもの大学は札幌にありまして、看護士、保健士、助産士、介護士を育てている特化した大学です。今回、非常に大きなタイトルをいただき、どこまで内容をお伝えすることができるか不安ですが、私たちが過去に取り組んできた事例を紹介します。

保健医療・福祉を取り巻く現状と課題

道内の医療・福祉の現状を考えますと、人口減少・少子高齢化が進み、医療・福祉サービスに携わる人たちが地域によって存在しない、また偏在している実態があり、多様化する価値観や地域の変化に対応できていない状況がみられます。医療・福祉がめざす姿は、安心して心豊かに暮らすことのできる地域社会を実現することにありますが、地域のみではなく札幌という都市の中でも高齢者の偏在と介護技術者の偏在など難しい側面もあり、全道的な実現にはまだ課題が残されています。

研究事例

少し古い事例ですが、平成17年に実施した「積雪寒冷地に居住する独居高齢者の産官学共同健康支援ネットワーク形成に関する基礎的研究」という内容を紹介します。この事例は、①積雪寒冷地に根ざした保健医療を考える。②予防と医療・介護を通じて自分らしい生活を送るにはどうしたらいいのか。③地域を横断した都市部等との連動・ネットワーク形成、を主眼としたものです。ネットワーク形成はゆるやかな連携をもとにいろいろな組織とのつながりを持とうと考えて実施しています。この事業は形を変えていまも継続中で最初の取り組みから約 10 年間コツコツとやっています。

問題の所在

健康・介護・福祉分野のネットワークを推進するためには情報通信技術の整備が必要ですが、技術のみでは解消できないもの、それだけでは置き換えられないものなどがあること。またITを使って高齢者の自己管理を進めようとしましたが、高齢の方は地域格差と年代格差など二重三重のディジタル・ディバイドを被るというハンディを背負っています。このプロジェクトを進めた年代が少し古かったためもあって、なかなかIT機器の操作・修練が進まないという実態がありました。

実施方法・結果

IT、情報技術を利用して高齢者個人とネットワーク

で支援することを基本に、まず健康支援をやりました。簡単な体操や食事の記録などを協力者にお願いしたのですが、先ほど話しましたとおり、パソコンの初期設定、ウイルスソフト等の導入など機器に関するすべての面倒をみなければならない、操作を指導しなければならない、そしてご高齢の方々がなかなか習熟されない、という問題がありました。

冬期間は外に出る機会が少なくなりますので、家の中でご自分で簡単な運動ができるようなプログラムを組んで、それを毎日ルーチン的に記録してもらう、同時に遠隔地で健康関連の専門家が状況確認し支援する仕組みを作りました。協力いただいた方は 71 歳から 80 歳の 7 名の高齢者で、期間は 1 月から 3 月までの 10 週間としました。

実施した結果は、3 名の方が運動時間が増加し、また全員が当初想定どおりの 10 週間、簡単な体操(らくらく体操)を継続することができました。

高齢者のＩＴ利用の注意点

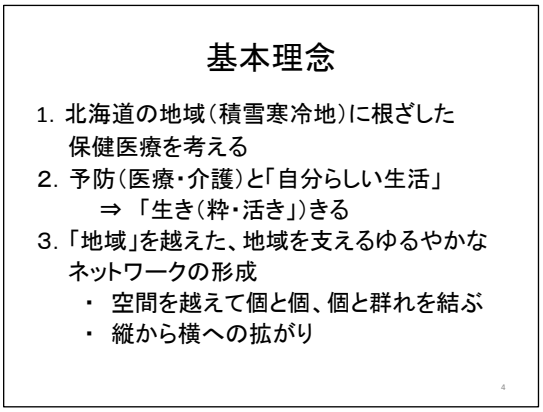
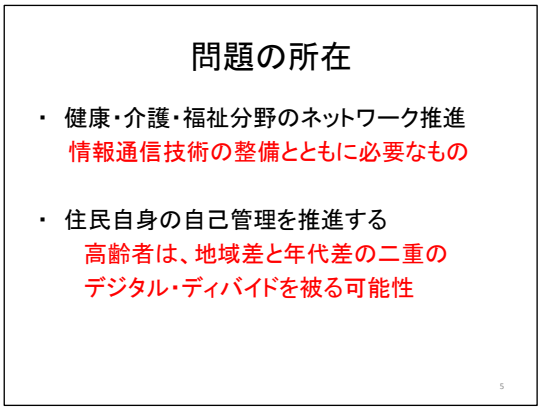
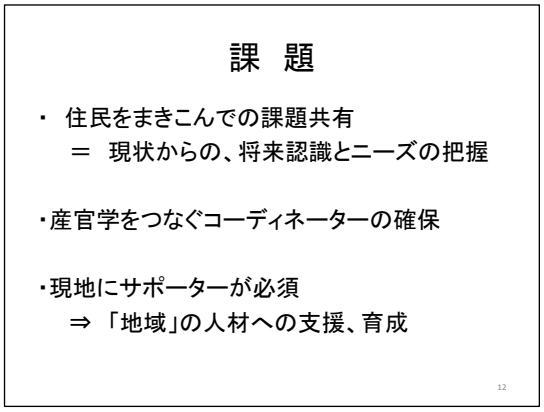
ご高齢の方が操作するために、ソフト作成時に何点か気をつけなければいけないことがあります。その経験をまとめました。まず、操作方法が覚えやすいことが一番です。つぎに操作手順が単純なこと。プロジェクト開始時にはみなさん興味を持っていろいろ操作するのですが、その操作が毎日ということになりますと、ごく単純な手順でなければ長続きしません。三番目として、誤って操作しないような画面作りが必要です。

課題

いままでやってきました中でいろいろな問題がありましたが、要約してつぎの三点が課題として残りました。

一つ目は、こうした調査や研究には、協力いただく地元のみなさんと共通認識をもつことが重要です。地元でどうしようと考えているのか、どうしたいのかというニーズをきちんと把握しませんとズレが生じてうまくいきません。

二つめは、いろいろな組織と連携できる仲介者が必要です。産官学をつなぐコーディネーターといいましょうか、人材が大切です。

三番目は、共通認識の必要性と同じ考えですが、現地にサポーターが必要です。地域で医療・福祉サービスに携わる人材を養成する、支援するということが大きな問題です。私たちはネットワークを通じて遠隔地で地域の個々人のみなさんに健康支援しようと試みていますが、やはり地域の人材なしには難しいのが実情です。

(つぎに話題の2番目として、北海商科大学商学部観光産業学科、細野昌和氏からモバイル活用の話題が提供されました。)